

## 霞蔵島 : 短歌

著者	晩翠
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 6 6
ページ	1 0 1 - 1 0 1
発行年	1918-03-31
その他の言語のタイトル	霞蔵島 : 短歌
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6788">http://hdl.handle.net/2298/6788</a>

かけるやうに歡樂のさいめきが聞えて来る、四邊が又暗くなつて街のはづれに直ぐ淡水河が深く流れてゐる  
河岸には納涼の人がちら／＼歩いてゐる。

星が落ちるやうに頭の上近く輝いて月影は細い、土人の歌が長く——聞える。

音もせず流れて行く淡水河が銀鼠色に光つて絹のやうな光澤<sup>ツヤ</sup>を帯びた水の色、其水の上を辯髪<sup>ラベカ</sup>の船頭は美しく彩色した龍頭船を操りながらする／＼と漕いで行く。

夜目には波が白く光る、ゴンドラにも似たる其美しい小舟、島人の奏つる羅面絃<sup>ラベカ</sup>の響、  
河の流れは私にかく囁く、ゴンドラの歌

そいろ、戀ごゝろ、月に奏づる、四絃琴、  
水の都、ヴェニスに浮ぶ小船、ゴンドラ。

行 路 梅

晚

翠

往來する人の衣の袖ことに匂をつゝむ梅の下みち

霞 藏 島

波よする島は霞に見えわかつて松吹く風の音のみそきく